

父の看取りと、 私への最期の宿題 「今から、ここから」3

ソーシャル
ワーカー

馬渡 徳子

かくして、地域の皆さんに見守られながら、三年が過ぎました。帰省中に、夜中のおむつ交換をしているときに、時々、父が「癌やったら、よかったのに・・・わるいね。」と、か細い声でつぶやくことがありました。段々と痩せていき、その頃は、要介護 2 になっていました。同居の弟は、太極拳と空手、気功をしており、まるで介護士のように、要らぬ力を使わずに上手に介助ができるのですが、私は本当に下手だったのでしょうか。職場の看護師や介護士、リハビリ職の仲間に、昼休みに実践で教えてもらっていたのですが、「徳子は、手が整わん。お口だけ美人や。」と言われました。(笑) けれども、最期の一年間は、母も弟も私も、点滴を抜いたり、痰の吸引も上手くなり、往診医や訪問看護師さんに、随分と褒めていただきました。

2014 年春から夏、父は自由な外回り中に、度々意識を失って救急搬送されました。歩行状態もふらふらで、けれど、認知症があるので検査ができなかったからと直ぐ

に帰らされていました。その頻度が週に 2、3 回にもなっていました。母に、「今度は違う救急病院に搬送してもらったら。本当にいつもの心臓病なの？ 脳を検査してもらって。」と伝えていました。その直近の救急搬送先は、また同じ総合病院でしたが、今回は母が「最近よく転ぶ」と話したことから、やっと脳の検査をして下さり、脳幹部近くの大きな慢性硬膜下血腫が見つかり、緊急手術となりました。術後、ベッドに四点柵と体幹と両手足をベルトとミトンで拘束されていた父は、麻酔が覚めた夜中から激しく抵抗し、二人の弟がずっと付き添っておりましたが、翌朝早朝の 5 時に強制退院となりました。父は、医療保険と差額ベッド代合わせて、わずか一泊二日 12 時間の入院で、合計 16 万円の支払いでした。「認知症だから」と説明され、最高額の差額ベッド特別室しか入れてもらえなかったそうです。ふらふらの父を、弟二人で何とか自家用車に乗せて帰ってきたそうです。弟から、「姉ちゃん、認知症に

なったら、みんな、治療を平気で拒否されるんか？ 姉ちゃんの病院でもそうか？ お父さんは、サウジアラビア紛争の時に、会社の指示でホテルの部屋から外出禁止とされていたことがあり、だからベッドに括られると思ひ出して怖かったから暴れたんだと思う。そのことを伝えたのに、沢山の書類にサインさせられて。ちょっと看護師さんの手をはらっただけなのに、暴力を振るったと騒がれて、本当に頭にきた。もう、二度とあんな病院には救急搬送して欲しくない。手術後の説明で、最低三週間の入院が必要と言ったくせに、脳の手術の翌朝には、転院先も紹介せず、自分で縫合部を消毒して、一週間後に抜糸に来なさいと追い出された。」と、石川県で連絡を受けた私は、病棟の申し送りの終わる九時を待って、病院側に連絡をしました。「こんな急な退院で、高血圧と脳梗塞の既往歴もあり、血液が固まらないようにする薬も二種類飲んでいる父の安全性が守れるのでしょうか？ 認知症の父が、頭の傷口を触って、感染症を起こしたらどうするのですか？ 処置に必要なものも、自分で薬局で買えとはどういうことですか？ 転院もできないならば、せめて、往診医や訪問看護へつなぐとか、、昨日入院の際に、ケアマネジャーさんも情報提供書を持って、ご挨拶に来られていますよね。」と、アサーションなんてすっかり忘れて、まさに、詰め寄りました。同じ医療従事者としても、心から本当に許せなかった。突然に退院を勧奨される患者さんのお気持ちが、本当に実感できました。結局、病院側からは、医療ソーシャルワーカーさんからも何の療養提案も戴けず、私はケアマネジャーさんと相

談することにしました。直ぐにケアマネジャーさんから、訪問看護ステーションと評判の良い往診医をご紹介戴き、その日から訪問看護と往診で経過を観ていくことにしました。後に、この訪問看護師さんと往診医がいなかったら、そのたった二ヶ月後に、末期胃癌は見つかりませんでした。往診医は、地域の女医さんで、同じく医師である旦那さんと二人で、24時間在宅支援診療所としてターミナルケアの実績も重ねておられました。何と、父の最初の主治医であった、あのおじいちゃん先生の娘さんでした。父は、女医さんのことを「〇〇ちゃん、立派になったね。」と子どものときの呼び名で呼んで、本当に和やかにおつきあいをしておりました。訪問看護師さんとも、最初から機嫌よく話をしており、父の抵抗は全くありませんでした。傷口を覆う網ネットも、父が面白がるように、ちょん髷やミッキーマウスのように工夫して結んで、毎日一緒に写真を撮って笑いとばして下さいました。私は「〇〇なんだから、触ったらだめよ。」と正当に注意を喚起するよりも、ちょっとしたユーモアで、こんなにも治療上必要な処置が抵抗なく上手くいくものかと、本当に勉強になりました。もちろん、先生、看護師さんと、父はよく簡単な英語で挨拶と会話をしていました。秋に、「この顔色の悪さは何？ 認知症の進行だけで、ここまで痩せないよ。入院中に胃カメラした？」と直ぐに胃カメラと腹部エコーをして下さり、末期胃癌が見つかりました。「余命、三ヶ月から長くて一年以内。胃癌そのものよりも、肺炎とか感染症でのリスクが高いね。旅行とか今のうちにね。」と言われました。

そこで、家族で相談し、孫・ひ孫に全員集合をかけて日帰りで贅沢グルメを楽しみました。父は、当時、自分一人ではもう着替えも困難な状態でしたが、何故か、ひ孫に靴下を上手に履かせておりました。自分の紙オムツも、丁度つかまり立ちをし始めた下半身裸のやんちゃなひ孫にはかせて、まるでドナルドダックのような姿を見て、父はケタケタと大笑い。その時の二人の表情が、あまりにも素敵だったので、写真とビデオに収めてあります。 デイサービスの方々は、水害時にも浸からなかった父の大切にしているアルバムに、付箋でちょっとした「聴き書き生活史」を作って下さり、父は大層自慢気にしておりました。

余命宣告直ぐに、先生の紹介で、認知症ケア専門士と緩和ケア専門医の資格を持つ外科と精神科の医師二人(二人とも自治医科大出身)をご紹介戴き、母の介護疲れに備えて、いざという時のレスパイト入院体制も整えることにしました。ですから、父のサービス担当者会議には、自宅に、毎回三人の医師とケアマネジャーさんと訪問看護師さんと訪問薬剤師さんとデイサービスと、後に訪問入浴の方が勢ぞろいしていました。母は、いつもとても恐縮がっておりましたが、先生方三人が、「それぞれの所属機関と専門分野の特徴を活かして、認知症の方が末期癌になられた時に、この地域の関係者がどういうしくみをつくって、どう動けば良いのか、旦那さんにモデルになっていただいているつもりです。ですから、どうか忌憚のないご要望をおっしゃってください。」と、おっしゃって下さいました。

本当の意味での地域包括ケアの構築実

践だと思えます。

かくして、父は、末期癌の病巣の余命宣告をはるかに超えた一年二ヶ月後に、天寿を全うしました。お看取りのエンゼルケアは、ご指導の下、家族皆んなでさせていただきました。

故郷の総合病院の対応にも呆れましたが、「逆に」医療従事者である自らと日本の医療制度の酷い実態も振り返る機会にもなりました。

天国のお父さん、
お父さんの応援団だった皆さん、
私と出逢い、お付き合い戴き、
お看送りさせて戴いた患者さん、
認知症の人と家族の会の皆さん、

私、
偶然にも、転勤でね
地域包括支援センターの
認知症地域支援推進員になったよ。

定年までの四年間に、
本当に素敵な「宿題」を、
ありがとうございました。

これからも、困難に出逢ったら、
右手の腕時計に目をやり、
『逆に』と認知を変えて、
五感を働かして、俯瞰して観るように
致します。

私の石川県の素敵な仲間にも、
心より、合掌。